

平成 22 年 3 月期第 3 四半期決算説明会概要

平成 22 年 2 月 9 日 15:30～16:30

於：東証ホール

**お断り:**このメモは、決算説明会にご出席になれなかった方々の便宜のためにご参考として掲載するものであり、説明会でお話したことの全てを一字一句書き起こしたものではありません。当社IR・広報担当の判断で、簡潔にまとめさせていただきました。ご了承ください。また、最終頁の注意書きもあわせてご覧ください。

**【CFO 江間より決算概要の説明】**

＜第 3 四半期(10～12 月)の連結業績＞

- 平成 21 年 12 月末時点の連結貸借対照表(決算短信補足資料 p.11)の「投資その他の資産」の「その他」176 億 28 百万円(直前四半期比 102 億 87 百万円増)は、ペンタックス統合に際して発行した社債(5 年、7 年、10 年債)のうち、5 年債(約 400 億円)の償還期限が 2012 年に来ますので、当第 3 四半期(3Q)に 100 億円を償還用の資金としてプールしているものです。
- 損益計算書(決算短信補足資料 p.13)の下の脚注に、為替の影響について記載しています。3Q において、US ドルは 5.1%の円高、ユーロは 5.5%の円安、タイバーツはほぼフラットでした。当社の連結子会社はほとんど海外にあります。海外の現地通貨を円に読み替えて連結しますので、その際のレート差による影響を記載しています。売上高がプラス 6 億 46 百万円、営業利益、経常利益、四半期純利益はそれぞれ約 1 億円のマイナスです。3Q は為替の影響はあまり大きくなかったということです。
- 連結売上高は、1,068 億 78 百万円(前年同期比 5.2%の減収)でした。そのうち、為替の影響を除いた事業ベースでは、EO(エレクトロオプティクス)部門で 45 億円の減収(△4%)、ペンタックスで 31 億円の減収(△2.8%)でした。
- 営業利益は 189 億 95 百万円で、売上高営業利益率は 17.8%、前年同期比 13.8%の増益でした。営業利益における為替の影響は約 1 億円ありますが、事業ベースでは EO が 18 億円のマイナスと、全体の減益率の 10.7%を占めます。ペンタックスは、前年同期は赤字でしたが、当3Q は黒字になり、26 億円の増益要因となりました。
- 昨年にはありました為替差益が、当期はありませんので、この分で 23 億円の減益要因です。受取利息は各国の金利が下がっておりその影響を受け 8 億円のマイナスです。持分法投資損失は 2 億 78 百万円で、前年同期に比べて損失が 13 億円減りました。それらの結果、経常利益は 197 億 24 百万円(売上高経常利益率は 18.5%、前年同期比 7.9%の増益)となりました。
- 特別損失については、環境整備費 17 億 70 百万円、その他 17 億 84 百万円で、その他の中の約 10 億円はメガネ事業におけるドイツのカルテル庁からの課徴金が確定した分です。
- 当期純利益は、117 億 91 百万円(前年同期比 6.5%の減益)でした。
- セグメント情報(決算短信補足資料 p.15)では、連結ベースで 58 億 62 百万円の減収に対して 23 億 8 百万円の増益となっています。EO が 19 億円の減益、それ以外は若干プラスで、ペンタ

ックスのセクターが黒字化しています。

- 製品別売上高増減率(決算短信補足資料 P.21)をご覧ください。昨年の第3四半期はリーマン・ショックが起こってすぐの時期でしたので、その影響を受け、3Q から4Q に向かって下振れて行きました。前年同期とは同じ土俵ではありませんが、当期も引き続き、各製品で価格の下振れがきついです。HDD 用ガラスディスク(MD)のメディアや、光学関連も単価下落が厳しいです。LSI 用 blanks、マスクはともに業界の影響を受け減収となりました。液晶用の大型マスクは物量も増え、プラスの 12%です。
- 当4Q の見込みは、昨年の4Q がボトムですので、それと比較すると、4Q は売上高が回復してくると見えています。直前四半期(3Q)との比較では、LSI マスクは 18%プラス、LCD マスクはほぼフラットの見通しです。ペンタックスの3Q の前年同期比△9.7%は、カメラのマイナスと内視鏡のスコープの物量減によるマイナスが影響しています。カメラは、K-x(100 色展開)は物量が 27%伸びていますが、コンパクトカメラが物量減で、カメラの売上が下振れしています。
- 9ヶ月の損益については(決算短信補足資料 p.4)、為替の影響が上期に大きく出ました。3Q は為替の影響は小さかった。9ヶ月の連結売上高は 625 億 84 百万円の減収(前年同期比△16.9%)、営業利益は 121 億 56 百万円(前年同期比△20.6%)の減益で、これは EO の各製品の単価下落が大きく影響しています。受取利息は、先ほどご説明したとおり、各国金利が低下しており金利がほとんど付かない状況です。前年同期は為替差益を計上しましたが、当期は為替差損となり、111 億円の減益要因です。
- 昨年度には、特別損益に、アヴァン・ストレートの持株を売却したり特許料をもらったりした合計額が 129 億円ありましたが、今年はそれがないので、利益的にはマイナス要因です。
- 環境整備費 22 億 46 百万円、その他特別損失にドイツのカルテル庁の課徴金が含まれており、当期純利益は 259 億 93 百万円(前年同期比△50.9%)です。
- 通期の見込み(決算短信補足資料 p.20)は、売上高 4,110 億円(前期比△9.5%)、営業利益 610 億円(同+3.2%)、経常利益 555 億円(同 △21.9%)、当期純利益 350 億円(同 +39.4%)、1 株当たり当期純利益は 80 円 86 銭です。

## 【CEO 鈴木より事業概況説明】

### <半導体用マスク blanks/フォトマスク>

- 半導体全般について、3Q は思ったより良くなかったです。半導体そのものは活況だったと思いますが、マスク業界から見ると、元気がよかったのはファンドリーだったので、ミクスという点で先端開発品よりも量産品が多かったようです。日本メーカーの中には先端の投資を諦め、先端開発をファンドリーに投げたりしているところもあるので、自分でマスクを起こして研究開発をするという動きが少なくなっているようです。製造という点でも淘汰が進んでいると思います。そういう意味で、マスク業界は構造不況業種と思います。
- 先端が動いていないので、今まで 60nm 用マスクで製造していたものを、90nm 用マスクを上手く使って、60nm に対応してしまうような動きもあり、これまで難しい領域はなんとかマスクで解決しようとしていましたが、製造サイドがこなれてきたこともあり、マスクのミクスが後退しているのだ

と思います。物量に変化はないです。

- 状況は足元でも大きく変わっていません。先端部分の開発は少しずつ動いているようです。メモリーメーカーもフラッシュメーカーも投資が動き始めているので、マスクもだんだん動き始めています。ただ、ファブもデバイスにより、忙しさにも差があるようで、マスクの開発・改版・デザインチェンジという点で見るとミドル・ローが状況が厳しいかもしれません。ファンドリーは動いていますが、基本的に量産品ですので、マスク需要には結びつきませんし、日本メーカーはミドル・ローのところの開発は少し時間をかけている状況です。ということで、当社の半導体 blanks・マスクは当分今のような状況が続くと思います。

#### <液晶用フォトマスク>

- 3Q も足元も良いです。3D を見越した開発需要があります。240k ヘルツで動かして画素数を増やすといった3D に向けた開発が動き始めています。また、全般的に、パネルが足りなくて量産に注力していた時期が過ぎて、今はパネルメーカーさんも少し余裕が出てきたようで、色々な品種展開を始めているようです。品質競争も始めているようで、台湾、韓国ともマスク需要そのものは悪くありませんでした。
- 4Q の足元も、2月には旧正月があり、韓国・台湾も稼働が落ちますので、数字的には良くないでしょうが、ファンダメンタルな活動では悪くないと思います。

#### <HDD 用ガラスメモリーディスク(MD)>

- メディアもサブもキャパが足りません。従って、3Q はもっと良くないといけなかったのですが、これ以上出荷できない状態でしたので、3Q も2Q と同じ出荷ベースとなりました。サブについては、今年の8~9月に新しいキャパが出てきます。6月くらいから段階的にキャパは増えて行きますが、その後、8~9月でさらに一回り規模が増えます。今もフル稼働で、作ったものは全部出していますので、このまま推移すると思います。
- 4Q は本来調整に入る時期ですが、今のところ、ドライブメーカーの調整は見られません。ドライブの在庫も積みあがっているとは聞いていませんので、逼迫した状態で4Q と来期の1Q まで行くと思います。ただ、サブはフル稼働でやっていますので、今のレベルを超えるのは無理だと思います。
- メディアもフル稼働です。昨年12月後半から320GB が立ち上がってきています。まだ比率は1割くらいですが、4Q から1Q の頭にかけて、中心帯が今の250GB から320GB に移りますので、そこで単価が上がると思います。数量的には増えませんが、単価が上がる分だけ、売上は増えると思います。

#### <メガネレンズ>

- 3Q はイベントがなく淡々と数字が出来上がりました。足元で感じるのは、日本の単価下落もさすがに止まってきたようです。過去3年くらい、日本は前年対比で2ケタのマイナス成長というのが続いていましたが、これ以上単価を下げても、消費者が反応しなくなったということがあるよう

です。日本の下落がある程度安定してきましたので、「海外は伸びているが、日本が足を引っ張る」という構図はなくなりそうです。

- 1月の数字を見ると、欧州が弱いです。欧州は全般的な消費が落ちているようで、この1ヶ月間は特に顕著になっています。アメリカ市場も不調の色が濃くなってきています。
- 4Qの見込みにも、マーケットが良くないだろうという見込みを考慮に入れています。3Qも思ったほど数字が上がらなかったのですが、4Qも見込みではそれ程強くないと見ています。

#### <通期見込み>

- 売上高 4,110 億円、営業利益 610 億円は、決してコンサバティブに作った数字ではありません。足元はあまり良い環境ではないというのが全般の印象です。

### 【COO 浜田より業績概況の説明】

#### <デジタルカメラ／光学レンズ等>

- コンパクトは昨年からほとんど伸びておらず、2007年レベルになりそうです。この2年間伸びがなかったということになります。景気も回復しておりませんし、コンパクトカメラでは、革新的な技術進歩がなくなってきており、画素競争もなくなり、今は薄くしたり、望遠にしたり、3倍を5倍にしたり、スマイルキャッチとかありますが、根本的な革新がないので、今後もあまり伸びないと見ています。
- SLRは昨年より伸びています。数%は伸びているでしょう。他社からはミラーレスや、動画よりのカメラ等、色々試行錯誤したカメラが出てきています。当社もSLRの主たるユーザーである中高年の男性から、さらにユーザー層を広げたいと考え、100色を出したりして、全体的に購買層を広げようとしていることも効果が出ており、今年もSLRは伸びていくと考えています。
- SLRは、夏頃に出したK-7(中型機)も評判が良く、K-x(100色展開)も評判良かったのですが、コンパクトカメラは苦戦しています。当社の商品企画力が足りないということもありますが、コンパクトは、量を取る、面を取る、量販店を押さえる必要があるため、プレゼンスを大きくして、ブランドの認知度を大きくしていく必要があります。ペンタックスは下位メーカーでその辺はまだまだ弱いかと思っています。今年度は商品企画に力を入れ、コンパクトで良い製品を出していく予定です。すでに今年に入り、2機種出しましたが、これらは評判がいいので楽しみに見ているところです。
- 光学レンズ・材料は、昨年が異常に悪かったので、前年比では今年は伸びていますが、単価は、昨年の苦しい時期に下がったレベルからあまり上がっていません。特に研磨レンズが、単価の下げが早いです。モールドレンズは単価は研磨レンズほど落ちていませんが、内製メーカーさんからのご注文の取り込みはまだ十分できていない状態です。
- 光学レンズ材料は物量は昨年より伸びていますが、単価は多少落ちています。全体的にボリュームは戻ってきていますし、4Q以降もそんな落ちる気配は感じられません。
- レンズ・ユニットは、昨年より伸びています。
- プラスチックレンズ(DVD、ブルーレイ用)の対物レンズは、TVもブルーレイも引き続き伸びてい

ますので、今のところ順調です。

#### <医療用内視鏡>

- 全体的に1Q、2Qに比べ、3Qは勢いがなくなっていました。4Qにかけては少し戻ってくると思います。3Qがボトムだと感じています。大きい病院や公的病院は予算がフリーズするケースが多いのですが、個人がやっている大腸内視鏡センターのような施設は、予算も自分たちで管理しており、医療改革の行方や診療報酬への影響を見極めようと心理的に買い控えている状態が続いているという感じです。
- アメリカは意思決定が早いようで、月によってアップダウンが激しいです。欧州はリーマン・ショックから急激なアップダウンは少なく安定していましたが、経済状況もよくないので、市場がゆっくり落ちているかフラットになる感じがします。
- アジアでは、中国市場が2桁(10~15%)成長しているようですし、当社も順調にやっております。ただ、インド、南米、東南アジア、といった新興国も伸びていますが、当社はまだ手をつけていない市場ですので、今年、来年は、新興国に力を入れていきたいと思っております。

#### <コンタクトレンズ>

- 国内161店舗、中国に7店舗持っています。日本市場は、5%ほど下がっていますが、当社の業績は2桁に近い成長を達成しています。当期(年間)で20店舗増やす予定で進めていますし、1店舗当たりのオペレーションの改善もあり、全体で伸びています。

#### <眼内レンズ(IOL)>

- 2Q、3Q、あまり伸びませんでした。日本市場は前年比3%マイナスだったようですが、当社は前年同期比で成長しています。欧州は2桁成長しており、もっと伸ばしていく予定です。アメリカは、10ヶ月前に進出したばかりで、まだ売上比率は小さいですが、四半期ごとに成長しています。ただ、営業やサービスの人間を採用していますので、費用が先行している形です。

#### 【質疑応答】

Q: マスクと blanks に厳しい見方を示されていますが、ダブル・パターニング用の液浸露光装置も漸く出るようですので、blanksにもプラスになってくるのではないかと思います。いかがでしょうか？

A: (鈴木 CEO) 設備投資の話も動き始め、マスクの方もだんだん動き始めていますが、昔に比べるとメーカーの数も減っていますし、マスクのデザイン数ということでも減っていますので、先端の32nmや22nm用マスクは動き始めてはいますが、全体から見ると、それほど大きな市場にはならないと思います。全体のミクスを変えるほどの枚数が出るとは思いません。昨年と比べれば、確かにステッパーが入っていけばその分プラスになります。ただし、これまでのミクスが変わることで単価が上がって右肩上がりに行く、という構図は描きにくいです。

Q: 製品別伸び率の表で、ブランクとLSIマスクの、3Qの直前四半期(2Q)比実績と、4Qの直前四半期(3Q)比見込みの数字の背景を教えてください。実績でブランクがプラスの伸びでLSIマスクがマイナスだったのは、カスタマーミクスが理由と考えればいいでしょうか？また、メモリーが増えるとブランク・マスクにはどのように影響しますか？

A: (鈴木 CEO) ブランクがフラットだったのは、先端部分は減っているが、ファンダリーの物量で稼いで、全体でフラットな状態ということです。マスクが落ちたのはお客様の数も少ないですし、個別企業の業績にもよりますので、カスタマーミクスの影響が大きいと思います。マスクのセットの数が減って、その分単価が高くなってきていますので、セットを取れるかどうかで大きく業績にも影響します。3Qはたまたま、研究開発費用をかけないようにしていたメーカーもあれば、量産に忙しくて先端用マスクを投入できなかったメーカーもいたようです。今後は、基本的にはフラットな状態で行くでしょう。メモリーの設備投資が増えたとしても、出るセット数は限られているし、ミクスが変わって大きく売上が成長するという絵は描きにくいです。

Q: 3Dの恩恵を受けているとのことですが、3Dによってマスクはどう変わるのですか？

A: (鈴木 CEO) 3Dのテレビはまだ研究開発の段階ですが、3Dになると、基本的には液晶のスクリーンを変えるスピードを倍にしないと、同じ画像、同じ画素のもが出てきませんので、今までの倍のスピードで液晶を動かすことになります。従来のトランジスタの構造では上手く行かないので、トランジスタを小さく細くすると、駆動スピードが上がり、シャッタースピードが上がるということになります。マスクそのものも、スペックは線幅も含め、半分になっていきます。ドライバ、ICも一回りスペックが上がるでしょう。ドライバ、ICの構造そのものももしかしたら変える必要があるかもしれません。

Q: ペンタックスの売上、3Qの前年同期比△9.7%の内訳を教えてください。特別損失50億円のうちペンタックスに係わるものは？

A: (江間 CFO) ペンタックスはカメラの赤字幅が減りました。3Qもカメラは若干の赤字でした。  
(鈴木 CEO) コンパクトカメラが良くなかったです。コンパクトはOEM生産に切り替えましたが、商品開発が上手く行かず、事業の足を引っ張りました。本来なら、内視鏡がもっと良くないといけないのですが、コストが日本円で、売上はドルとユーロなので、為替の影響が大きく、また、医療製品なので許認可の関係もあり簡単にコストダウンが図れない。今後、設計変更をしながらコスト構造を下げていかないといけません。

(江間 CFO) 特損の環境整備費17億円はペンタックス絡みです。そのほか、「その他」に含まれる評価損で数億円、減損4億57百万円もペンタックス関係のものです。

Q: 4Qのペンタックスの営業利益率の見込みは？来期上期の見込みは？

A: (鈴木 CEO) 内視鏡は、医療機関全体で設備投資を絞ってきているので、内視鏡の市場が良かったという印象はありません。ペンタックスの収益については、早く良くしたいと思っていますが、構造を変えていかないといけないところがあり、製品コストそのものについても設計変更をしていく

必要があります。また、販売効率を高める必要があります。短期的にはこの2点を全力を挙げて対応していく必要があると考えています。

Q: ガラスディスクは、3Qは2Q比で2%の減収とのことですが、フル稼働状態のことですが、サブとメディアの減収幅はどのような感じでしたか？

A: (鈴木 CEO) サブの方がマイナス幅が大きく、メディアは若干のマイナスでした。サブについては、3ヶ月前は生産ベースでお話をしましたが、実際は2Qにかなりの在庫を掃きました。期初の4~5月にほとんどご注文がなかったのですが、4つの工場の内1つは動かして、そこで在庫を積んでいました。それを2Qに出したので、売上として立っていましたが、3Qは在庫もなく、本当の意味でのフル稼働での実力値であったということになります。1~3月期は、稼働率は3Qと変わりませんが、稼働日が少ないので、8%くらいは落ちると思います。単価については、メディアは記憶容量が増えますので上がっていきますし、サブは現在のような状況で値段は下がりませんので今は大丈夫だと思います。

Q: 今年度の減価償却費と設備投資額は前回発表時と変更はありますか？来年度の見込みは？また、経費の削減幅はどの程度と考えていますか？

A: (鈴木 CEO) 設備投資はMDのサブの分がプラスになっています。

(江間 CFO) 当期の設備投資額は中間期に申し上げた数字(280億円)から変更はありません。来期についてはこれから予算編成を経て組みます。フィリピンの工場の分が乗ってきますので、感覚的にはその分が少し増えるかもしれません。

(鈴木 CEO) 経費削減については、リーマン・ショックの頃に、「人件費を落として、年間で200億円規模の経費削減をやって、それで年間600億円を超える営業利益を出せる」と言及しましたが、結果的にはそれに近い数字にはなったと思います。600億円超の営業利益にはそういった経費削減分が含まれています。今後は、事業によって、環境的にもう一回り体を縮めないで収益構造が出来ないという事業はありますので、来期もそういう意味のコストダウンは継続してやっていきます。

以上

**本資料中には将来の当社の業績・当社を取り巻く業界の環境に対する予想の部分ががあります。これは当社および当社グループが現時点で入手可能な情報から得られた判断に基づいており、リスクや不確実性を含んでおり、その内容の完全性・正確性を会社として保証するものではありません。従いまして、これらの予想の部分に全面的に依拠して投資判断を下すことはお控えくださるようお願いいたします。実際の業績・業界環境は、様々な要素により、これら予想とは大きく異なる結果となりうることをご承知おき下さい。投資等の最終決定は、ご自身の判断でなさるようお願いいたします。投資の結果に対する責任は負いかねますのでご了承ください。**